

Title	時況節の位置と談話解釈上の機能 - quand 節とcomme 節の分析
Author(s)	高橋, 克欣
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 11-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88370
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

時況節の位置と談話解釈上の機能 - quand 節と comme 節の分析 - 高橋克欣

1. はじめに

筆者は高橋 (2021) において、時間的同時性をあらかず半過去が、主節との同時性をあらかず時況節である *quand* 節および *comme* 節の中で用いられる場合はたらしきの違いを説明するために、これらの時況節の談話解釈上の機能と半過去の解釈メカニズムについて論じた。本稿では、その中で今後の課題とした問題の中から、*quand* 節や *comme* 節が主節に対して前置される場合と後置される場合との談話解釈上の機能の違いについて考察を行う。

以下では、まず 2 節で談話解釈と時況節の機能について高橋 (2021) において考察が不十分であった点を確認する。それをふまえ、3 節で主節に対して前置された時況節の機能について、4 節で主節に対して後置された時況節の機能について考察し、5 節では *quand* 節と *comme* 節の文中の位置関係による機能の違いについて、談話解釈の観点から明示的に説明することを試みる。6 節では本稿のまとめを行い今後の課題に言及する。

2. 談話解釈における時況節の機能

高橋 (2021 : 18) では、時間的同時性をあらかず半過去が、主節との同時性をあらかず時況節と考えられている *quand* 節および *comme* 節の中で用いられる場合の解釈の違いについて次のように述べた。

quand 節において半過去を用いて場面設定（または場面特定）の機能を果たすためには談話内に何らかの利用可能な解釈資源が存在する必要がある、必然的に *quand* 節中の半過去の使用は限定的なものとなる。その一方で *comme* 節において半過去を用いる場合には主節の事態との関係によってひとつの文の中で半過去の解釈が成立するため、半過去の使用は特に問題とならない。

このこと自体は妥当であるとしても、この主張においては主節と時況節の位置関係が考慮されていない点に課題が残る。談話解釈の観点からは、同じ時況節であっても文中における位置によって担う機能が異なりうることに留意すべきである。

Riegel, Pellat et Rioul (2016 : 849) が説くように、主節に対して前置された時況節は主節によってあらわされる事態が位置づけられる枠組みを提供するのに対し、主節に対して後置された時況節は主題をあらわす¹。また、福地 (1985) は英語の副詞節の位置による談話上の機能の違いについて論じている。

そこで、本稿では時況節が主節に対して前置される場合と後置される場合それぞれにお

¹ ここでは原文の *propos* に対して「主題」という訳語を充てている。

いて時況節が担う機能について、談話解釈の観点から考察を行う。

3. 主節に対して前置された時況節の機能と談話解釈

福地 (1985:211) は「文頭にある副詞節は基本的に文全体の主題として旧情報を担い、主節が新情報を伝える」と述べているが、このことは基本的にフランス語の時況節についても当てはまることである。つまり、図と地の関係でいうならば時況節が地であるのに対して主節が図となり、主節の内容が伝えたいこととなる。

(1) *Quand Camille entra dans la salle de bains, Franck et Myriam s’y trouvaient déjà.*

(Anna Gavalda, *Ensemble, c’est tout*)

(2) *Vers neuf heures du matin, comme je prenais une deuxième tasse de café, on sonna.*

(Amélie Nothomb, *Le fait du prince*)

quand 節や comme 節以外の時況節も、主節に対して前置されることが少なくない。

(3) *Pendant qu’on se mettait en rang, le Bouillon est venu.* (Sempé-Gosciny, *Le Petit Nicolas*)

(4) *Alors que la voiture quittait la ville et parcourait la campagne, Alice regarda défilier les pâturages et se demanda si elle n’aurait pas préféré rester sur le plancher des vaches, quitte à ce que le voyage dure plus longtemps.* (Marc Levy, *L’étrange voyage de Monsieur Daldry*)

(5) *Tandis que je réfléchissais à tout cela, le téléphone retentit (...).*

(Eliette Abécassis, *Un heureux événement*)

(6) *Au moment où il commençait à m’expliquer sa vision de l’esthétique des cérémonies rituelles, Flic fit son entrée dans le bureau, vêtu d’un impeccable blazer bleu marine (...).*

(Michel Houellebecq, *La possibilité d’une île*)

(7) *Depuis que je connaissais ce numéro, je l’avais souvent imaginée montant les marches d’un pas de plus en plus lent.*

(Patrick Modiano, *La Petite Bijou*)

それぞれの時況節は異なる統語的・意味的特性を持っているが、主節を解釈するために必要となる何らかの枠組みを提供するという談話解釈上の機能を考えれば、主節に対して時況節が前置されることが多いことは理に叶ったことである。主節に先行する時況節によって提供された枠組みに合わせて、後続する主節の談話的解釈が行われるのである。

筆者は高橋 (2016 : 67) において, *quand* 節の機能は「主節の事態が生起したのがいつであるかを示すために場面の特定を行うことにある」と主張したが (仮説③), 主節に対する *quand* 節の位置関係が考慮されていない点において不十分な主張であるといえる. そこで, 前置された *quand* 節の談話解釈上の機能を本稿では次のように再定義する.

前置された *quand* 節の談話解釈上の機能

主節によってあらわされる事態の時間的位置を特定するために, 談話時空間内で場面の指定を行う².

このように再定義するのは次の理由による. 高橋 (2016) では主節で単純過去や複合過去が用いられ, *quand* 節で半過去が用いられる場合の解釈条件を説明することに主眼が置かれているため, 前述の仮説③は *quand* 節全般に当てはまるとはいいがたい.

実際のところ, *quand* 節があらわす「時間的同时性」は, かならずしも厳密な意味での「同時性」とはかぎらない. 次の (8) のように, 過去の完了時制 (単純過去) *arrivâmes* と半過去 *était* が用いられる場合には2つの事態は同時に生起したと解釈されるが, これは *quand* が備える「時間的同时性」の意味にくわえ, 半過去が備える同時性の意味効果によるものであるとみなすべきである.

(8) *Quand nous arrivâmes à San Remo l'homme était là.* (Arsène Lupin, *Le Bouchon de cristal*)

一方で, たとえば次の (9) のように *quand* 節と主節の両方で完了時制 (*trouva, appuya*) が用いられる場合には, *quand* 節があらわす事態と主節があらわす事態は継起的な時間関係を持つものとして解釈される³.

(9) *Quand il la (=la télécommande de sa télévision) trouva, il appuya sur une touche.*

(Marc Levy, *La prochaine fois*)

以上のことから, *quand* 節があらわすのは「緩い時間的同时性」であるといえる⁴.

なお, *quand* 節の中で用いられる過去時制は単純過去や複合過去などの完了時制が多い

² 高橋 (2021) では「場面設定」および「場面特定」という表現を用いたが, 本稿では「場面の指定」という表現に統一する. 「場面の指定」については5節で論じる.

³ 主節と *quand* 節の両方で完了時制が用いられた場合であっても時間的同时性をあらわすと解釈されることがあるが, これは *quand* 節が備える時間的同时性の意味効果が前面にあらわれた場合であると考えられることができる.

⁴ 「継起性」を有するということは, 主節と時況節であらわされる事態が時間的に連続して生起することになるため, 結局のところ, 当該の連続する2つの事態が「同時」に生起したと認識されることになる.

が、談話解釈上必要な要素がそろえば *quand* 節の中で半過去が用いられることもある⁵。

(10) *Quand je traversais l'Amérique à pied, comme tout successeur de Kerouac qui se respecte, j'ai essayé les drogues disponibles sur les routes et dans le désert, ce qui fait beaucoup.*

(Amélie Nothomb, *Une forme de vie*)

次に、*comme* 節が前置された場合の機能について考察する。朝倉 (2005 : 418-419) では、時況節として用いられる *comme* 節の特徴として次のことがあげられている。

(I) <*comme*+時況節>は主節の前に置かれるのが普通だが、その後にも置かれ得る。

(II) <*comme*+時況節>の動詞は、例外を除けば半過去形に限られる。

(III) 時況節はいつも肯定。

(I) について、次の (11) と (12) は Imbs (1960) における引用例であるが、いずれも *comme* 節中の半過去は主節の単純過去や複合過去と同時に起こった事態をあらわす。

(11) *Comme le solidaire disait ces mots, son corps s'effaçait peu à peu.*

(J. Green, cité par Imbs 1960 : 91)

(12) *On l'a tuée ? demanda-t-elle, comme Maigret s'asseyait près de la fenêtre.*

(Simenon, cité par Imbs 1960 : 91)

(III) について、次の例のように *comme* 節の中で用いられる半過去の動詞が否定形の場合、*comme* 節は原因節として解釈されるが、主節との時間的同時性も成立している。

(13) *Comme je ne voulais pas rester à côté d'elle et entendre ça, je suis parti.*

(Hubert Mingarelli, *La dernière neige*)

また島岡 (1999 : 874) でも、*comme* 節と時間的同時性について「*quand* より強い。後には *quand* ではとれない半過去形がくることが多い。多くは文頭にくるが、後にくることもある。」と説明されている。

朝倉 (2005) や島岡 (1999) が述べる、*comme* 節が *quand* 節よりも強い時間的同時性を持つことと、例外を除けば時況節としての *comme* 節がもつばら半過去形をとまうこととは互いに関連し合った特徴であると考えることができる。

⁵ このことについては高橋 (2014, 2016) で具体的に論じているので、ここでは詳しく論じない。

これは、*quand* 節とは異なり、時況節としての *comme* 節は主節の事態と同時に生起した事態を積極的にあらかわす機能を持っていることを意味する。そこで、前置された *comme* 節の談話解釈上の機能を本稿では次のように定義する。

前置された *comme* 節の談話解釈上の機能

主節によってあらかわされる事態と時間的同時性を持つ事態をあらかわすために、談話時空間において場面の焦点化を行う。

(14) *Comme la voiture entrait en ville, Rivière se fit conduire au bureau de la Compagnie.*

(Antoine de Saint-Exupéry, *Vol de nuit*)

4. 主節に対して後置された時況節の機能と談話解釈

次に、主節に対して後置された時況節について考察する。福地 (1985 : 211) は「文末の副詞節は、談話上のはたらきが複雑である。(中略) 文末の副詞節は旧情報を担うこともあれば新情報のこともある」と述べているが、このことも基本的にフランス語の時況節についても当てはまることである。これは、図と地の関係でいえば、常に時況節が地であり主節が図であるとはかぎらず、場合により時況節が地になることもあれば図になることもあるということになる。

主節に対して後置された *quand* 節について、旧情報を担う場合としては次のような例が該当する。

(15) *J'étais seul quand on a enterré mon père et j'ai passé la nuit couché sur sa tombe.*

(Patrick Modiano, *La ronde de nuit*)

(15) では、半過去で示される主節の事態が生起した場面を談話時空間内で指定するために、後置された *quand* 節が用いられている。

次の (16) では主節で複合過去が用いられ、後置された *quand* 節で半過去が用いられているが、ここでも後置された *quand* 節は、主節の事態が生起した場面を談話時空間内で指定する機能を果たしている。

(16) *J'ai connu Francis Jansen quand j'avais dix-neuf ans, au printemps de 1964, (...).*

(Patrick Modiano, *Chien de printemps*)

一方、後置された *quand* 節が新情報を担う場合としては、いわゆる「逆従属の *quand* 節」と呼ばれる次のような例が該当する。

(17) (...) et j'allais commencer à leur donner des claques, *quand le Bouillon a sonné la cloche de la rentrée* (...). (Sempé-Goscinny, *Le Petit Nicolas Le Ballon*)

(17) で後置された *quand* 節によってあらわされる事態は、主節の事態との時間的同時性を持つものの、談話構成上は主節の事態と同一の場面で生起する事態としては解釈されず、談話時空間内にあらたな場面が指定され、そこで事態が展開していくと解釈される。

これらのことをふまえると、後置された *quand* 節の談話解釈上の機能は次のように定義することができる。

後置された *quand* 節の談話解釈上の機能

- (a) 主節によってあらわされる事態の時間的位置を明確にするために、談話時空間内で場面の指定を行う。
- (b) 談話を展開するために談話時空間内のあらたな場面を指定し、そこに主節によってあらわされる事態とは切り離された事態を定位する。

後置された *quand* 節が旧情報を担う場合の機能が (a) に相当し、新情報を担う場合の機能が (b) に相当する。

一方、後置された *comme* 節の機能については十分な数の用例が収集できていないため示唆にとどまるものであるが、前掲の (12) から分かることとしては、あくまでも主節の事態が生起した場面の状況を補足的に説明するものにすぎず、後置された *comme* 節が積極的に場面を指定する機能を果たすとは考えにくいということである。

(12) On l'a tuée ? demanda-t-elle, *comme* Maigret s'asseyait près de la fenêtre.

後置された *comme* 節の談話解釈上の機能

談話時空間においてすでに設定済の場面に焦点を当て、主節によってあらわされる事態と時間的同時性を持つ事態を定位する。

もちろん、以下に示すように *quand* 節や *comme* 節以外の時況節が主節に対して後置されることもある。

(18) (...) il brisa leur accord tacite et lui adressa la parole *pendant qu'elle s'amusait avec des pastels* (...). (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*)

(19) L'aspect du ciel a changé *tandis que* j'attendais assis au bord de la route nationale. (Hubert Mingarelli, *La dernière neige*)

5. 談話解釈における quand 節と comme 節の機能

最後に、quand 節による場面の指定と comme 節による場面の焦点化の違いを考察する。

quand 節は、主節に対して前置される場合も後置される場合も、談話の進行にしたがい談話時空間内に複数導入されると考えられる一連の場面群の中から特定の場面を選択し、提示する機能を担っていると考えられる。このことを本稿では「場面の指定」と呼ぶ。

それに対し、comme 節を用いる際には談話時空間内の潜在的な場面群の存在が認識される必要はなく、主節および comme 節であらわされる 2 つの事態が同時におさめられる場面に焦点を当てることがその機能であると考えられる。

両者の違いを図示すると、次のようになる。

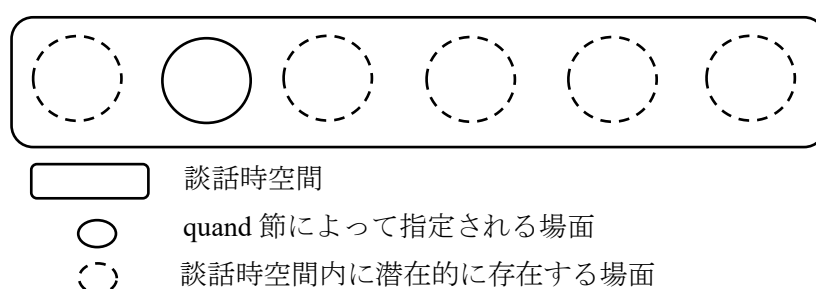


図 1 談話解釈における quand 節の機能⁶

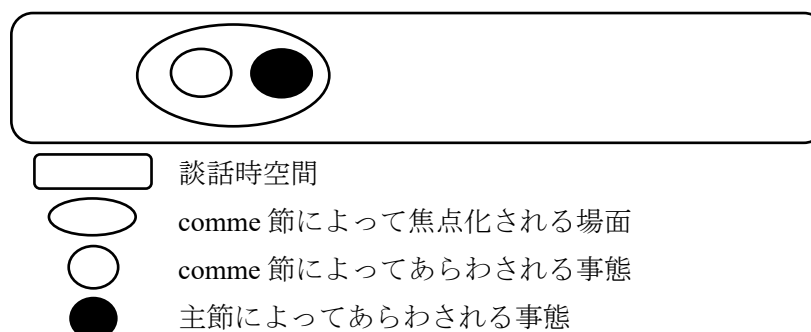


図 2 談話解釈における comme 節の機能⁷

6. まとめと今後の課題

本稿では、主節との時間的同時性をあらかず時況節である quand 節および comme 節が、主節に対して前置される場合と後置される場合の機能の違いについて、談話解釈の観点か

⁶ この図式の中に主節によってあらわされる事態と quand 節によってあらわされる事態が描かれていないのは、4 節で論じたように、後置された quand 節の場合には主節の事態と quand 節の事態との関係が 2 通りあると考えられるからである。

⁷ 「場面」の概念を時間的なものに限定しなければ、comme 節が原因節として解釈される場合にもこの図式を適用することができる。comme 節を用いる際には、時間関係であれ因果関係であれ、2 つの事態が同じ認識的枠組みの中で解釈される必要があるのである。

ら考察した。

quand 節と comme 節は主節との時間的同時性をあらわすという共通点を持つものの、談話上の機能が異なっている。前置された quand 節は主節によってあらわされる事態の時間的位置を特定するために談話時空間内で場面の指定を行うのに対し、後置された quand 節は談話時空間内で場面の指定を行う機能は共通しているが談話解釈上の機能が異なる。一方、前置された comme 節は時間的同時性を持つ2つの事態が定位される共通の場面を設定し焦点化するのに対し、後置された comme 節は主節によってあらわされる事態と時間的同時性を持つ事態を定位するために談話時空間においてすでに設定済の場面を焦点化する。

本稿では高橋 (2021) に続き quand 節および comme 節を考察対象としたが、その他の時況節についても多くの用例の観察および分析を行い、各時況節の位置と談話解釈上の機能との関係を明らかにしたうえで各時況節の機能の特徴を見きわめる必要がある。

また、次のように同一文中で複数の時況節が用いられることもあるが、このような場合の時況節同士の関係について詳しく考察した先行研究は管見の限りほとんど見られない。

(20) *Quand il entra dans le bistro avec d'infinies précautions et une moue d'huissier, alors que nous peignions de rouge et de vert de très fons bouchons de balsa sculptés tout exprès pour l'ablette, je compris que c'en était fini pour moi d'un grand pan de douceur.*

(Philippe Claudel, *Le Café de l'Excelsior*)

今後はこれらの問題について多数の用例を詳細に分析したうえで考察を重ね、人間の時間認識とその言語化のありかたについてさらに理解を深めることを目指したい。

参考文献

Paul Imbs. (1960) *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.

Martin Riegel, Jean-Christophe Pellat et René Rioul. (2016) *Grammaire méthodique du français*, 6^e édition, Presses Universitaires de France.

朝倉季雄 (木下光一・校閲) (2005) 『フランス文法集成』白水社。

島岡茂 (1999) 『フランス語統辞論』大学書林。

高橋克欣 (2014) 「時を表す副詞節における半過去と談話的時制解釈」春木仁孝・東郷雄二編 『フランス語学の最前線』 2:pp.331-368.ひつじ書房。

高橋克欣 (2016) 『「こと」の認識「とき」の表現-フランス語の quand 節と半過去』京都大学学術出版会。

高橋克欣 (2021) 「談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム - 談話的時制解釈の観点からの分析 - 」『時空と認知の言語学X』言語文化共同研究プロジェクト 2020 : pp.11-19.

福地肇 (1985) 『談話の構造』大修館書店。